

## 対談 水俣・福島を生きる宗教性

石原明子<sup>1</sup>

霜村真康<sup>2</sup>

司会：弓山達也<sup>3</sup>

2021年8月24日実施（オンラインで実施）

霜村真康氏はいわき市の寺院副住職で、市民の対話の場「未来会議」の副事務局長も務めている。石原明子氏は水俣市に居住しながら、紛争解決・平和構築の専門家として水俣病公害事件や福島原子力災害の調査やそれに関する実践活動をし、「未来会議」にも参加してきた。

大きな苦難を経験した後、さらに人間関係の分断や葛藤、対立、社会的なコンフリクトをも抱えることになった市民たちは、対話や、地域間の交流、地域の祭や踊りの復活、そして市民の間から次々と生まれてきた儀式や祈り、イベント、アートといったものとおして、どのように和解や許し、癒し、再生に導かれているのだろうか。この対談ではお二人の取り組みを紹介するとともに、その儀礼的・宗教的な意味についても語っていただいた。

<sup>1</sup> いしはらあきこ：熊本大学准教授

<sup>2</sup> しもむらしんこう：浄土宗菩提院副住職、「未来会議」副事務局長

<sup>3</sup> ゆみやまたつや：東京工業大学教授、(公財)国際宗教研究所常務理事

**弓山** 今回の『現代宗教2022』の特集テーマは「儀礼の変容」ですが、そこには市民の願いや祈りを込めた活動も儀礼と呼べるかもしれないとの着想があります。対話、出会い、自己変容、自己開示、許し、和解などをキーワードにすれば、世俗の市民参加の対話や実践も、宗教的な儀礼と実は近いところにあるのではないかと。そこで今回、水俣や福島浜通り（沿岸部）で市民を巻き込んで研究や実践を進められている石原明子さんと霜村真康さんというお二人の対談をお願いすることになりました。

石原さんからは事前に「水俣・福島を生きる宗教性」というキーワードもいただいています。宗教儀礼は、生きること、死ぬこと、生まれ育つこと、老いることなどと密接に関わっています。その意味で「水俣・福島を生きる」と「宗教性」とは無関係ではなく、追究する価値が十分にあると考えています。

最後に、今日は信仰を持つお二人にお出でいただいておりますので、水俣や福島での研究や実践をどのように見ているのか、お二人が知り合われた経緯も含めてお話しいたきたいと思っています。

**石原** ありがとうございます。最初に少し確認ですが、私はクリスチャンなのですが、普段、儀礼という言葉にあまりなじみがないのですが、ここでいう儀礼とは何でしょうか。

**弓山** いろいろな見方ができますが、儀礼の持つ意味の一つは「人々を束ねたり、同じような苦しみや喜びを共有したりできる仕組み」だと考えています。しかし一方で、たとえばオリンピック／パラリンピックでは皆が仲良く一体感を醸し出しますが、同時に今回のように、それを通して世論が割れることもあります。ですから、儀礼とは人々を束ねる行いであるとともに、人々を引き離す機能も持っています。そこに宗教が関わると、価値観も関係することになるので、より白黒がはっきりしたり、さらに強く人々を束ねたり、逆に排除したりすることができたり、何かを共感、共有させたりする力を持つと同時に、分断の起爆剤となる

危険性を有する何かがあるかもしれません。そのあたりを伺いたいと考えています。

**石原** 宗教だけに使う言葉ではないということですね。

**弓山** はい。一般的に言うと、儀礼という言葉には「形式的」「形骸化」などのネガティブな含みもありますが、むしろそれを積極的に捉えて、人々を束ねる力を持っているもの、感情を共有できるような仕組みと考えています。

## 水俣と福島をつないだ「修復的正義」実践のプログラム

**弓山** 霜村さんは、震災後に、石原さんの誘いで水俣を訪問されたようですが、そもそもどういう経緯でお二人はあわれて、福島と水俣の交流が行われたのですか。

**石原** 霜村さんと初めてお会いしたのは福島会議だったか、あるいはあとで詳しくお話があると思いますが、霜村さんたちがやっておられる「未来会議」という活動について聞きつけて参加したときだったかもしれません。私が福島の若手の方々に水俣に来ていただくプログラムを計画実施したのは2013年で、少し長くなりますが、重要なことなので、経緯をお話しします。

東日本大震災があったとき、私の籍は熊本大学にありましたが、長期海外研修で米国のカリフォルニア州立バークレー校にいました。米国にも津波の映像がリアルタイムで流れてきましたし、東京電力福島第一原発を24時間体制で中継していて、原発が突然爆発した映像もまさにその瞬間に流れていました。バークレーの日本人コミュニティにとっても、途方もないことが起こっている、自分たちの祖国、故郷が無くなってしまうのではないかという感覚を覚える体験でした。東北出身のバークレーの学生の中にも、家族との連絡が7日間も取れず、大変な恐怖と

不安の中にいた人もいました。バークレーの町には、オープンハイマーが在籍したローレンス・バークレー研究所というところもあり、原子力研究における歴史のある地で、東京大学の原子力工学科の教員も毎年留学しているということでした。そのため、震災から1週間後には、日本人コミュニティで、その東大から留学中の教員やバークレー在籍の原子力工学を専門とする研究者に話を聞く勉強会を開いたり、1か月後には、バークレー在住で放射性物質で汚染された環境を修復するための学問である「核環境修復学」の専門家の日本人女性研究者から話を聞いたりという活動をしました。米国でも、日本人コミュニティは、大きな不安を感じていました。

私は2011年7月に、震災後初めて一時帰国し、栃木県的那須にあるアジア学院という農業を教える学校を訪ねました。そこで偶然、のちにこの事故の国会事故調査委員会の委員になる崎山比早子先生の講演がありました。もう少し話を聞きたいと思い、講演後、崎山先生が郡山市に向かう新幹線に同乗しました。その後、縁あって、郡山市や福島市と移動し、飯舘村や伊達市からの方に出会い、原発災害の被災地や被災者の現状に私は愕然としました。というのも、原発災害の被災地の皆さんは、地震による揺れ、津波、そして放射能汚染で本当に大変だろうと思っていたところに加えて、人間関係の深刻な分断や葛藤を抱えて苦しんでいたからです。郡山で出会った母親である女性は「震災で大変なときだからこそ、皆が力を合わせたいのに、どんどんバラバラになっていくんです」といいました。私は紛争解決学や平和構築学が専門ですが、それまでは私の専門が震災と関係があると考えたことは一度もありませんでした。紛争解決学が対象にすべき分断が、まさに被災地に起こっていると知り、驚きました。そして、ぞっとしました。というのも、熊本大学に就職後に移り住んだ水俣で起こっていることと同じことが繰り返されていると感じたからです。

水俣も、水俣病公害事件の後、地域の人間関係の分断を経験してきました。いろいろなことがありましたが、ある時期から患者の一部に「赦す」とおっしゃる方があらわれはじめました。「赦す」という言葉を経

で、今の水俣があります。しかしその「赦す」とは、「もう水に流すからいいよ、忘れるよ」という意味ではなく、「お願いだから、自分たちのような苦しみはこれで最後にしてほしい。赦して、私たちが傷つけたあなたを人として受け入れるから、あなたもこの苦しみに向き合って、このような悲しみが二度と起こらない社会にしてほしい」という命を懸けた祈りであり、願いであり、宣言です。水俣に暮らして、そう感じたのですが、水俣の被害や分断と同じことが福島の原子力災害で起こり始めているのを見て、愕然としました。そこから、取りつかれたように、原発災害に関わることになりました。

私はまた米国に戻った後、2011年夏から2012年5月までは、キリスト教のメノナイト<sup>1)</sup>という教派がつくった、イースタンメノナイト大学にいました。紛争変容や平和構築に関する大学院・研究所で、主に修復的正義(正義ある和解)の研究をしていました。例えば内戦において、国連軍が入って内戦を止めさせても、昨日まで殺し合い、加害者と被害者になった住民同士が、戦争は終わりだから今日から仲良く暮らせと言



石原明子(いしはら・あきこ)

熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授。専門は、紛争変容・平和構築学、特に修復的正義。水俣と福島の交流のアクションリサーチ研究を続ける。東北アジア平和構築インスティテュート運営委員。日本福音ルーテル教会員。

われても次の日から安心して共に暮らすことは容易ではありません。イースタンメノナイト大学は、草の根の平和構築という言葉が指すような、内戦後の人と人との和解や共に暮らす方法を研究しています。私はそこで、日本の原発事故被災地域で起こっている分断をテーマに分析し、何をどのように実践すればよいかを考えていました。そして2012年5月に完全帰国しました。

通常なら、紛争解決の実践としては対話を行うのですが、対話支援活動でもしようかと思っていた矢先に、南相馬のある方に「先生、間違っても、福島に来て対話のファシリテーションなどをしようとは思わないでくださいね。責任を持ってない外の人に来て現地をかき回すのは迷惑です」とくぎを刺されました。遠くから月に1回だけ来て対話の場だけをつくり、そこで市民が傷ついても放って帰ってしまうという、無責任なことはやめてほしいという意味だったと思います。そして「熊本大学の先生だからこそできることをしてほしい」と言われました。

そのように多くの方と出会う中で、福島県立相馬高校の放送局の高校生に水俣に来てもらう機会がありました。そのとき、相馬高校の高校生と水俣の語り部である緒方正実さんの対話で、深い魂の響き合いがあったことを感じ、その化学反応に驚きました。その体験を通して、現地での住民間の対話以外の方法で分断からの変容に資する方法を考えるようになりました。そして平和構築・紛争解決理論にもとづいてプログラムした、福島の若手のリーダーたちに水俣に来てもらうツアーを行うことになりました。そのツアーに、霜村さんたち、未来会議の皆さんに参加いただいたのでした。

**弓山** まず相馬高校の生徒たちが水俣に行き、その実績を踏まえて、次は若手リーダーである霜村さんたちを招へいしたのですね。

**石原** そうです。このプログラムと「儀礼」との関係で重要なポイントをお話します。

私の専門分野である「修復的正義」とは、地域で生じた分断を修復し

て和解するための一つの指針であり、考え方です。「修復」とは人間関係の修復で、和解する、赦すこととも関連することなのですが、日本人の場合、「ゆるす」というと「水に流して忘れる」という言い方をします。しかし、理不尽な苦しみに遭った人にとって、「水に流せ」と言われても、本人が忘れたいと思っていないのにそれを強要されることは、さらなる暴力、不正義です。そのような場合に、おかしいものはおかしいときちんと向き合った上で和解にむかって行こうということで、「おかしいことにきちんと向き合って」というのが修復的正義の「正義」の部分です。このプログラムのポイントは、その考え方をどのように福島に応用できるかということでした。

水俣では、後に詳しく述べますが「もやい直し」という形で人間関係の修復をしています。それも、水俣病公害事件を過去のこととして忘れるようとするのではなく、むしろみなで水俣病公害事件に向き合ってその反省から未来をつくっていかうとする動きでした。患者のリーダーの側からは、「チツソも行政も赦す。赦すからこそ一緒に向き合ってほしい」という哲学も生まれました。水俣には、修復的正義のエッセンスがあります。福島の方に、修復的正義の魂のようなものが育ってきた水俣と出会っていただきたいと思っていました。

**弓山** そのプログラムはどのくらいの規模で行われたのですか。

**石原** 第1回は約10名で2泊3日、第2回も12～13名で3泊4日でした。その後も水俣と福島の交流は形を変えて続いています。

**霜村** そのときの写真です（写真を画面共有する）。現地の方との交流会です。

## 世代を超えてつなぐこと

**石原** 実は交流会というのも理論的には重要で、1日目には第1世代の

運動家の人たちなどとの飲み会をします。それは年配の男性が多いのですが、2日目の晩には、水俣の第2、第3世代の若手と福島の若手との交流をしてもらいました。これが非常に重要で、まさに儀礼の変容的な意味を持っています。

**弓山** ありがとうございます。受講した霜村さんは、そこで何を学び、それをどのように未来会議に生かしたのか、あるいはヒントを得られたのでしょうか。

**霜村** 未来会議からは私を含めて3人が参加しました。例えば永野三智さん<sup>2)</sup>と相思社でたくさんお話しして、非常に共感しあえたことも一つです。

杉本肇さん<sup>3)</sup>のお宅で、肇さんが「自分たちがもっと早く水俣病の問題に向き合っていれば、福島はこのような目に遭わずに済んだかもしれない、大変申し訳ない」と涙を流されたところが、この4日間のツアーのハイライトでした。この言葉は私たちにずっと刺さり続けています。私たちもつないでいかなければならないという強烈なメッセージをもらいました。他にも「やうちブラザーズ」の活動、子どもたちの民舞みたいなものもあり、印象深く心に残っています。

**石原** 子どもたちが踊るのは、きっと「水俣ハイヤ節」のことですね。

**弓山** 杉本肇さんとのストーリーは印象的です。杉本さんはどのような意味でおっしゃったのでしょうか。

**霜村** 肇さん自身、家族が水俣病の患者であり、自分もそうかもしれないという青春時代を送り、その現実から逃れたくて地域から離れたことがあったそうです。離れていたことを後悔している、離れていた期間中も自分がその問題に向き合って、語り部などの活動をして声を大にして伝えていけば、というニュアンスだったと理解しています。

**弓山** 自らと向き合う重要性を強調されたということですね。

**霜村** はい。また向き合うタイミングも含まれていると思います。逆に、肇さんのような有名な方でも、逃げた時期があったということです。私たちにも逃げたい気持ちはあったので、それを聞いて、許された気持ちになるメッセージでした。

**石原** 肇さんは、愛情を注いでくれた祖父が劇症型水俣病で亡くなり、父母も相次いで入院をしていき、長男として弟たちと過ごしたときの言葉にならない不安を寂しさをお話してくださりました。水俣病に見舞われた家族の人生、自身の人生、自分が生まれ育った地元が嫌で嫌で仕方がなく、高校卒業後には、一度水俣を捨てて東京に出たという話をしてくださいました。その話に胸が締め付けられるような思いで話を聞いていたときに、肇さんが突然泣き崩れながら、「もしも自分が逃げずにもっと早く水俣病の問題に向き合っていれば、原発事故は起こらなかったのではないかと。福島のあなたたちに謝りたい」とおっしゃりました。その言葉を聞いて、私も参加者も号泣しました。

**弓山** 霜村さんは年齢的にはいわゆる水俣の第2世代と同じかもしれませんが、そして原発事故を目の当たりにした第1世代でもあります。福島県に住みつつも30キロ圏外ということで避難したという訳ではなく、自分は直接の当事者ではなく、支援者という感覚がどこかにあるのでしょうか。

**霜村** そうかもしれません。永野さんは支援者第2世代という非常に特殊な立ち位置です。福島の場合、双葉郡の人ではない人間は外の人、などといった障壁がありますが、外から行った人と地元の人との距離感なども考えさせられました。

**弓山** つまり、世代的な縦の隔たりだけではなく、原発30キロ圏内の

中心部にいて避難を余儀なくされた人と、いわきのようにそれを受け入れる側との、感覚の違いもはっきりとしてきたという訳ですね。

**霜村** 「あなたたちは当事者ではなく中間支援者だ」と言われる一方で、自分たちにはそうした意識もなく、自分たちは自分たちのために語り場をつくるとの意識で進めています。しかし、やはり越えられるところと、越えられないところがあります。明子先生も外から水俣へ行って活動して、受け入れられるところとそうでないところがあって当然ですが、そのようなことも見る事ができたと思います。

**弓山** これは対談とは関係ありませんが、私は新宗教の研究をしており、新宗教でも第2世代論は興味深いです。教祖に会った第1世代が信仰熱心なのは当然ですが、第2世代には教祖と直接まみえなかったからこそ、理想の姿を求めて信仰が独特な深化を遂げるということがあります。今、それを少し思い出しました。外部から関わっている石原先生や、いわゆる避難を余儀なくされた人ではない、いわきに住んでいる霜村さんが使命感を持っているところを興味深く感じました。

## 福島のコフプリクト

**弓山** 石原さんにお尋ねしますが、紛争解決学的に、このツアーにはどのような意義があったのですか。

**石原** 学問的意味と、学問を超える宗教的な意味があります。学問的にはかなりかっちりしたベースがあるものですが、参加者の方々にはそのような理論的な話はせずに実施しています。

福島のコフプリクトには2つの特徴があると考えています。その1つは、皆が傷ついた中でぶつかり合ってしまうことです。

皆が傷ついていると、傷ついた思いのやり場や出口として、自分を責めたり(アクト・イン)、他人を責めたりする(アクト・アウト)という

ことがトラウマの心理現象として出てきます。たとえば戦争などでは、自分がされたことに対する恐怖やトラウマが、次の攻撃・反撃・先取攻撃の源泉になりますが、これは戦争だけでなく震災や大災害でも起こります。皆が傷ついた中では、特に立場の弱い人にしわ寄せが行きます。原発災害によって市民も東電も国も皆が傷ついてトラウマ化された中では、東電や国よりも市民・弱者にしわ寄せが行って、分断させられてしまうこととなります。

宗教儀礼とも関係しますが、そのトラウマや悲しみに向き合う「喪の作業」をして初めて、人は、自分とは違う現実にした人と出会う心の余裕ができます。その中で、自分から見れば敵だと思っていた人とも対話する余裕が出てきます。そのように心の余裕が生まれ、自分の敵や問題と向き合うには、「喪の作業」が必要です。そのために、対話、祈り、アートによる表現などが役立つことがあります。

福島のコンフリクトのもう1つの特徴は、専門用語で「アシンメトリックコンフリクト」というのですが、葛藤を持つ人同士の力関係が非対称な場合に起きるコンフリクトであることです。

東電や国と市民の関係はその典型です。力の強い大企業や国と、市民という、力関係が非対称なコンフリクトの場合には、対話をしようとしても、力が強い方の当事者は、心を開いた対話のテーブルに着こうとしません。力の弱いほうの当事者に至っては、自分たちが虐げられていることにすら気付けない構造に置かれてしまうことがあるといわれています。黒人差別とそこからの解放運動などは、典型的な例です。奴隷制が当然とされる環境では、黒人の奴隷が白人に殴られても当然とされており、反撃もしません。黒人解放運動ではまず、黒人も人間なのだから痛いと感じるのは当然で、殴られるのは当然ではないと気づかせる（awareness raising）という過程がありました。気づいた被抑圧者が痛みや権利に目覚めて、声を上げるようになって初めて、抑圧者の人たちは被抑圧者の声を無視できなくなり、仕方なく対話のテーブルに着くのです。

福島と水俣で行ったツアーのプログラムでは、こうしたいくつかの要

素を混ぜています。ポイントは、主なステークホルダーとして国、東京電力、市民一人ひとり考えた場合、力関係が非対称ですので、この関係性の中では、原発災害のしわ寄せは、東京電力や国システムよりは、被災地の市民一人ひとりに行ってしまうがちです。しわ寄せが行った被災者市民が、その中で追い込まれて、不幸なことにお互いが敵だと思ってしまう。しかし本当に闘うべき相手あるいは問題解決のために交渉すべき相手は、どちらかと言えば原発事故を引き起こした東電や国の方なのです。本当の敵・問題は隣にいる人ではなく、震災であり原発事故なのです。すなわち、根本原因は別にあることを理解しなければ、市民が分断させられる状況に入ってしまう、と気づいてもらうステップがまず必要です。それに気づいて初めて、分断させられていた人同士の対話が開かれるという、次のステップに進めます。

福島の方々の水俣への訪問プログラムでは、私たちは、福島について直接言及することは一切しませんでした。そうではなく、福島の水俣を見ていただき、あとは参加者自身が自分で福島について考えていただければ、と考えました。水俣では、企業も国も原因がわかっていながら隠している状況が9年続き、その中で市民が分断させられていきました。それに市民がどのように向き合ったかという、裁判を起こした人もいれば、赦した人、祈った人、座り込み運動をした人もいました。こうしたいろいろな方法があることを見ていただいて、ともに涙する時間を持つプログラムを入れました。ここにはある意味で、宗教の儀礼と同じように、紛争解決の儀礼のようなものがあります。

## 未来会議とは

弓山 ありがとうございます。先ほど、石原さんから対話、祈り、アートという話がありました。私は未来会議に2016年から参加し始めて、時々、参加しているだけですが、まさに対話、祈り、アートこそが、未来会議が実践していることだと捉えています。水俣の話に進む前に、未来会議の紹介をしていただいたほうがいいでしょう。霜村さん、未来会

議の概略のご説明をお願いしますでしょうか。

**霜村** 未来会議は、短く言えば、対話の場をつくり続ける活動です。その場で語られたことをアーカイブし続け、その場所ですれ違った人たちが思いついた活動をつながげながら展開し、実践自体を助けるためのプラットフォームとなる、これらが3本の柱になっています。4人の発起人は2012年の終わり頃に出会い、未来会議がスタートしました。期待することはそれぞれ異なりましたが、対話の場を継続することが必要だという思いは同じでした。

前段をお話ししますと、2011年の震災で原子力災害が起き、双葉郡エリアには4月に警戒区域が設定され、強制的避難を余儀なくされた人たちが出ました。いわきも含め沿岸部では、津波によって多くの方が亡くなり、4月11日の余震などでも建物に相当な被害が出ました。2012年になる頃には、双葉郡から強制避難させられた人たちが、最も近いいわきの仮設住宅に住居を移す動きが活発になっていきました。2012年春には避難区域の再編があり、旧警戒区域から、今ではほとんどなく



霜村真康（しもむら・しんこう）

2001年、大正大学人間学部社会福祉学専攻卒。2005年より菩提院副住職。2013年より未来会議副事務局長。

なっている3区域（帰還困難区域・居住制限区域・避難指示解除準備区域）への再編がありました。一時帰宅が少し容易になってからは、遠くへ避難していた双葉郡の住民もいわきに住居を設けるようになっていきました。

また、当初、原発の復旧作業を行うための唯一の入り口がJビレッジで、南側から入るしかないので、作業員の多くはいわき市に寝泊まりして通っていました。沿岸部でも復旧工事等が徐々に盛んになり、そこで働く労働者も全国から入ってきたために、ピーク時には2万人以上の双葉郡からの避難者と1万人以上の労働者が、人口33万人で右肩下がりがだったいわき市に居住していました。このように人口バランスが大きく変化したために、生活インフラにも大きな負担がかかり、さまざまな不満が噴出するようになっていきました。

いわきにも間違いなく放射能汚染はありましたが、避難指示は出ませんでした。特に子育て世代の若い親の多くは、はたしてこの地域に住み続けていいのかと悩んでいました。自主避難が可能な人とそうではない人が混在していました。避難したくてもできない家庭もあれば、父親だけが福島に残り、母親が子どもを連れて遠くへ移った結果、そのまま家族が壊れてしまった家庭もあります。同じ小中学校に子どもを通わせている家庭同士でも、放射能に対する心配の度合いにはばらつきがあり、除染が徹底されなければ外では遊ばせたくないという親もいれば、外で遊ばせないほうが体に悪いという親もいました。やがて、そういうことを口に出すこと自体が新たな分断を生むという煩わしさが生まれ、話題にしにくくなるという状況もありました。

さらに、同じ仮設住宅でも、いわき市が設置する仮設住宅には津波や地震で住めなくなった方が入居していましたが、道一本隔てた広野町や楢葉町の仮設住宅には原発事故による避難者が住んでいました。強制避難の家庭には1人あたり月に10万円程度、東電からの一時的な賠償金が入る。一方で、家が全て流されて、家族もまだ見つからないにもかかわらず賠償金を受け取れない人たちもいました。このような金銭的な分断も顕著に表れていました。2012年頃のこうした状況が、未来会

議の前段になっています。

こういう状況の中で、未来会議のきっかけになるワークショップを仕掛けてくれたのが東日本大震災復興支援財団です。この財団はソフトバンクの孫正義さんが100億円を出して、東北の子どもたちを救うために創設されました。そのミッションの一環で、日本ファシリテーション協会の田坂逸朗さんをファシリテーターとして、ワールドカフェなどの形式をとった対話形式のヒアリングの会を仕掛けていきました。田坂さんは今もお世話になっているプロファシリテーターです。当時、成立していた、通称「原発事故子ども被災者支援法」の具体的な施策についてのヒアリングを行うワークショップを福島県内各地、広域避難者のいる多くの都市で行いました。

その中のいわき市で行う会議では、当時さまざまな支援活動に携わっていた、大人、子ども支援、高齢者、教育関係者、医療関係者などのあらゆるセクターからステークホルダーを集めたいということで、私にも声が掛かり、私もそのワークショップに参加しました。いわきのワークショップは一連のワークショップの中でも最大規模となり、50人近い人数となりました。話された内容の熱量やボリューム自体も最大になっていたそうです。そこでは、それまでの1年以上の活動の中での困り事や悩み事、将来の話などを打ち明けて、非常にすっきりした人も多く、これまで私たちに足りなかったのはこのような場だ、このような場が続けばいいと感じた人が少なくありませんでした。それで、現在のコアメンバーである菅波香織さん（未来会議事務局長／弁護士）たちが、財団に対して、このような対話の場を継続してほしいと相談しました。その結果、子どもの支援と直接関係がなく、本来の財団の趣旨とはやや違いますが、2013年1月から8月までの5回のワークショップを継続して開催するための支援をしてくれることになりました。それが未来会議のきっかけです。

財団からは、その地域でファシリテーターを育て、対話の場が自走する状態まで持っていくことがミッションとして課せられたので、コアメンバー4人が、最初の1年間はOJT（実務をしながら学ぶ）形式で田坂

さんの後についてファシリテーターの訓練を受けながら、事務局を運営しながら進めました。

**弓山** ありがとうございます。私は2016年頃に参加したときには、分断というより、幸せとは何か、あるいは大切なものとは何かという価値に関わる話が多かった印象です。皆さんの口からはよく「もやっとした」という言葉が出ていて、もやっとしたことはいいことだというやりとりが私にとっては耳新しく、面白いと感じながら関わっていました。初期の頃には、未来会議の中で、分断を背景とする葛藤や対立が展開されることはあったのですか。

**霜村** 最初の1、2回は支援者的な方々や、いろいろな立場を代弁できる方々に直接声を掛けて、スモールスタートしようということでした。それでも70人規模にはなっていました。その中で、すでに別の活動で知り合っていた平山勉さん（双葉郡未来会議代表）を通じて、双葉郡の方々にも参加をお願いしました。双葉郡の藤田大さん（鳥藤本店専務）から、第3回目に、1年放置されてネズミに食い散らかされたところを見に来るか誘われて、行くことになり、「行ってみっペツァー」が始まりました。そのように、いわきの人と双葉郡の人との間の壁や葛藤、賠償などの現状を見てみようとのやりとりが最初の年から始まっていました。

未来会議のコアメンバーである菅波さんや藤城光さん（デザイナー）にとっても最も印象深くなっていたのは、未来会議が自走した2014年の1回目です。原発に絶対反対で、福島産の食材を給食に出すのはまだ早いから他の地域のものを使うべきと主張している母親、一度は不安を感じて広域避難したが、勉強を重ねた結果いわきで安心して子育てができる環境が整ったという確信を持ったので帰ってきたという母親、風評被害に苦しみながらも安心して食べてもらえる野菜を作りたいという20代の若手農業者など、さまざまな人たちに同じテーブルに着いてもらい、フィッシュボール（金魚鉢）方式の対話で会議を行いました。そ

の場ですぐに相手の意見を否定しないというルールで行いましたが、福島産食材を食べさせるのは反対だという母親からは、未来会議とはもう一緒にできないという離別状を送られました。お互いの理解を深めて、つながる場にしたいとの思いで、通常は交わることのない人たちが交わる場をつくることができたことの価値はありましたが、そのような形で分かれることになってしまったという傷も残りました。

**石原** 私もその場にいました。

**霜村** これが初回で、明子先生にはコメンテーターをお願いしていました。

## 未来会議の今後

**弓山** 石原さんは未来会議をどのようにご覧になっていますか。私自身は、「グラフィックファシリテーション」という、議事録を壁に書いていく手法に驚きました。田坂さんの師匠筋に当たる中野民夫先生が東京工業大学の同僚なので、ファシリテーション自体については何となく見聞きはしていましたが、実際に市民の中で展開した様子を見て驚きました。

**石原** 私は、紛争解決の実践と研究を行っていますが、水俣と福島の流れの方が実践だとすると、研究の側面では、未来会議さんを含め、多様な対話活動の参与観察研究をしてきました。

未来会議は、どこよりも大人数で継続しています。対話の手法も団体によって違うのですが、未来会議は以前からワールドカフェ（リラックスした雰囲気での自由な対話）やフィッシュボールという、まちづくりなどで使う、比較的ポップで、皆が使いやすい対話の手法をとっておられます。こういう対話手法では、原子力災害や震災のような心の傷について話すことはできないのではと心配する人もいます。しかし私は、未

来会議の人たちは非常にシンプルな手法で、喜びや、深い分断、悲しみといったものを、広い海のように包摂しているように見え、感心しています。

**弓山** 石原さんの話を聞いて思い出したのですが、たとえば教室で対話の授業などを行う場合は、こちらも学生がそう逸脱することはないだろうと予想できたり、出てくる発言もおおよその予測ができたりします。ところが未来会議では、こんなことも言うのかと驚くことがあります。あるいは、「この指とまれ」と言って複数提案された事柄について話し合うときに、大勢が集まっているグループもあれば、1人しかいないグループもあります。もし自分がその状況でファシリテーションするとなると困惑するような場面でも、非常にうまくこなされているのがすばらしい。私が2016年に参加するまでの間にも、おそらくいろいろなことがあって、このような形に仕上がってきたのだらうと思いました。

**石原** いわきの未来会議では人が育っていると感銘します。最初は外部からファシリテーターを呼び、霜村さんたちは参加者でしたが、今では、未来会議の運営チームの皆さん自身が、高いファシリテーション能力や対話能力を身に付けておられます。それを最も感じているのは、霜村さんたちかもしれません。素晴らしいことと感じます。

この10年間、未来会議の役割や特徴はフェーズごとに異なってきましたが、今はまた新しいフェーズに入っており、曲がり角に来ているように感じます。霜村さんたちも感じているのではないのでしょうか。

2点あるのですが、その1つは、未来会議は奇跡のように民主的な団体だったことです。これほどの分断がある中で、いろいろな人にオープンにしていました。運営体制も非常に民主的で、発起人の4人が強権的な力を持つのではなく、この指とまれのスタイルでさまざまな人が運営に参加してきました。今後もこのやり方で続けていくこともできますし、それでは誰が事務局かもわからなくなるということで、もう少しきちんと組織化するという選択肢もあるのでしょうか。そういう議論が出て

くるのは、これは対話の会、市民の会としては自然の流れと感じます。

もう1つは、未来会議の今後の方向性です。未来会議の方たちとも話してみたいと思っていることなのですが、いわきは特殊な場所で、東京から双葉郡に入るときに、その手前にある都市です。双葉郡は、原子力災害行政上、非常に重要な場所で、これは今後100年変わりません。いわきの市民は、国にとって、地元住民と合意形成したいとき、あるいは合意形成したように見せたいときに、ちょうどよい良い入り口、窓口なんです。ですから悪く言えば、未来会議は国や企業などの大きな勢力から、双葉郡に関する合意形成のために「狙われて」いて、良く言えば、期待されていると思います。未来会議が、国や大きな団体から「浜通りの市民の声を代表する場」として期待されればされるほど、国などに反対の立場の人たちからは、未来会議は国に近い団体として見えてしまい、未来会議に入りにくいと感じるかもしれません。逆に言えば、市民としても、国や東電を含む大きな勢力と対話を続けていく入り口は不可欠です。未来会議フレンド・ファンの一人としても、研究者としても、未来会議がどの方向に向かうのか、日々、考えながら過ごしています。

**霜村** どうなるのでしょうかね。

**弓山** 対談の冒頭で、儀礼は人々を束ねる機能を持つとともに、離反を生んだり、溝を深めたりしてしまうというネガティブな機能も持っていると話しました。未来会議はまさにその束ねる機能を発揮して最大勢力になっています。だからこそ、そこからこぼれ落ちてしまう人々をどうするのが課題になっているということでしょうか。

**石原** 私は、そこまでのことを思っているわけではありません。未来会議はそれほど束ねてはいないからです。未来会議の素晴らしい点は、束ねず、あまりこぼさないところです。

**霜村** こぼしたくはありません。摂取不捨です。束ねるといっても、こ

ちらから抱きついてしまうのではなく、常々、この指とまれをするしかないと思っています。来たい人は来てください、来たくない人は見ていてくださいというスタンスで、未来会議は関わってくれた全ての人のものであるという意識は、最初からの共通認識です。

とはいえ、コアメンバーの中には、きちんと組織化すべきだと主張し続けている方もいるので、悩ましいところです。しかし、それがなければ助成金を取ることもできず、継続もできませんでした。私や菅波さんのようなフィーリングで進む、適当すぎる人たちがこの中で活動し続けることができたのも(笑)、緩さがあったからでしょう。それが、分解することなく、継続できた理由だと思います。

難しいかもしれませんが、国や東電で決定権を持っているような立場の人たちをも取りこぼしたくない、包摂したいという夢もあります。そのような人たちから、市民の声が聞けるチャンネルの一つとして認識されているのであれば、それは非常に価値があります。今度のオンライン会議には、離れてしまった奥田修司さんもゲストとして来ます。元東電の石崎芳行さんも付かず離れず参加しています。環境省やエネルギー庁の人たちも、個人単位で何となく参加し続けてくれているのは、そうした人たちを排除したくないとの思いがわれわれにあったからでしょう。こういうことができているのはわれわれだけだという意識はあります。とはいえ、未来会議を押さえれば、いわき、双葉を押さえたことになるかといえば、そうではないでしょう。

**弓山** 中央省庁からも随分来ていますね。

**霜村** そうですね。未来会議が始まったときから不思議に思っています。民間支援団体や中央省庁の人などが、リアルな話を直接聞くことができ、自分も参加者として入っていいと思える場所は珍しいと感じてくれているらしく、来てくれています。逆に、いわき市など、地域の行政の人は少ないです。

**石原** 未来会議のすばらしい点は、これまで、行政や東電の人から放射能に不安を感じている人や批判的に思っている人までを包摂する度量の深さであり続けてきた、と思っています。

私はクリスチャンですが、未来会議というプラットフォームは、仏様の手のひらの上に人間が乗せられてコロコロ転がっているという比喻のように感じています。今日のテーマに寄せているわけではなく、紛争解決は宗教儀礼であると、私も以前から考えていました。たとえば、内戦のあとの修復的正義や和解も、実のところ、集団で葬式をしているようなものです。殺し合いや悲しいことによる傷が癒えていない、その傷とは単にメンタルヘルスのレベルではなく、霊的な問題です。ですから、集団お葬式をしているのです。紛争解決を実践するときに、私はそのことをかなり意識しており、霊的なチャンネルの使用は不可欠だと思っています。

その意味で、研究者としての観察からいえば、対話の場づくりの中にはいろいろなタイプがあります。未来会議が、仏様の手のひらで人間が自由に「遊ぶ場」を作っている会だとすれば、一点突破で深く入っていくような対話の場づくりをしている会もあります。本当にそれぞれの個性があります。そのような意味で、罪ある人も、どんな人も仏様の手のひらの上にあるというのが、私の未来会議に対するイメージです。

**弓山** ありがとうございます。学生4人とともに未来会議の東電第一原発の視察に行ったことがあるのですが、その学生のレポートを見ると、学生たちは非常に内省していました。原発事故の現場を見たからでもあると思いますが、むしろその後の未来会議での対話によって、自分が言ったことが受け入れられた経験もその理由になっていたようです。震災のときに関西にいたためにボランティアに行けなかったことでコンプレックスを感じていたある学生は、それを思い返ししながら未来会議に出ていたのですが、未来会議によってその自分と和解できたという経験をしています。未来会議にそのような機能があることを知って感心するとともに、面白いと感じたので、論文にもまとめました<sup>4)</sup>。そのように、

他者と交わることによって自己を深めていく機能もあると思いました。

**霜村** 外から来た人が福島を語っていいのだろうかという壁はあるようです。それは移住してきたとしても同じです。たとえば、山根麻衣子さん<sup>5)</sup>も双葉郡に住んで長いので、十分、双葉住民と言えるのですが、それでもやはり、「外の人」、「あのときいなかった人」ということがいつもつきまっています。しかし、その彼女が、語っていいと初めて言われた場所が未来会議の場だったと言っていました。そのような人たちを取り込む入り口にはなっていると思います。

## 水俣の「もやい直し」

**弓山** ここで水俣の話に移ります。本誌の編集長である島蘭進先生は、先のお話で出た杉本肇さんのお母さんで水俣病患者としてのご自身の体験を語り継いでこられた杉本栄子さんに注目されています。1994年5月、当時の吉井正澄水俣市長から謝罪と「もやい直し」の提唱がありました。そして同年11月に開催された第1回「火のまつり」で白装束の栄子さんが恨みではなく感謝の、そして全てを受け入れるという祈りの言葉を手向けられ、参加者の魂が揺さぶられたと聞いています。「まつり」といっても宗教的な儀式ではなかったでしょう。しかし癒しというか、なかば宗教的な救済すら、きっとこの火のまつりにはあったのかもしれない。島蘭編集長のこうした着眼点が、「儀礼の変容」というテーマで、水俣や福島の実践を扱う対談となっています。

石原さんからは、事前の打ち合わせで、「もやい直し」はキャッチフレーズで具体的な実践のプログラムの名称ではないと伺っていますが、ご説明いただけますでしょうか。

**石原** 「もやい直し」とは、分断した地域の人間関係を再構築しようということです。その意味での「もやい直し」の言葉が最初に公式に使われたのは、お話のとおり1994年の慰霊式で、吉井正澄市長（当時）が

市長としての初めての公式謝罪を行ったときに、「今日の日を市民皆が心を寄せ合う「もやい直し」の始まりの日といたします」と述べました。もともと吉井さんご自身では「内面社会の再構築」という言葉を使っておられ、「もやい直し」という言葉をつくられたのは緒方正人さんといわれています。水俣市職員（当時）の吉本哲郎さんが緒方さんの「もやい直し」という言葉が、吉井市長からの人間関係や内面社会の再構築の呼びかけにはぴったりだろうということで、使うことを提案されたようです。吉井さんは「もやい直し」は行政の政策名やプログラム名ではなく、行政的には当時のすべての政策の基盤となる思想・考え方であったといいます。また市民に対しては運動論的にわかりやすい「キャッチフレーズ（呼びかけ）」として機能したと考えられます。

水俣病公害事件やその前の安賃闘争などで、人間関係が分断した水俣で、人間関係を再構築する動き、それはすなわち、多くの市民にとってタブーであった水俣病にきちんと向き合おうとする動きでもあったのですが、それが出てきたのは、実際には吉井さんの言葉の前に、患者リーダーらの中での赦し等に関連する様々な思想的深化と表現（例えば緒方正人さんの「チッソは私であった」や杉本栄子さんの「のさり」の思想、他）、民間レベルでの動き、県の動きなどが1980年代からありました。そのような機運がある種、熟し始めていた中で、市長としての「もやい直し」の呼びかけもあり、さらに水俣の地域再生や人間関係の再構築なども吉井市政下では進んでいったと考えています。地域内の歴史的にはそのようなことですが、一般に水俣病問題に関心がある方の中には、吉井さんがこの言葉を使われる前も含めた、患者らの思想的・霊的な深化や官民レベルの人間関係再構築にむかって行く動き含めて、漠として「もやい直し」というイメージに希望を感じている方も多いように感じます。そしてこの時代には、人間関係の再構築に向けて、紛争解決学による和解や癒しのセオリーの王道にも思える多くの「儀礼」がなされていました。

弓山 具体的には、どのようなことが起こったのでしょうか。

**石原** いくつかの流れがあると思います。一つには、水俣病の犠牲者の慰霊を市民皆で、あるいは公的なものとして担って行こうという動きです。行政による水俣病犠牲者慰霊式が行われるようになり参加者も増えていったこと、また、行政が管理する土地で皆が行き来する埋立地・エコパークに「本願の会」<sup>6)</sup>による野仏(石像)が建立されていったこと、火の祭りなどがあると思います。二つ目は、自分と異なった立場の人の話を聞いたり、対話をしたりする仕掛けです。「市民講座」や「ごみの分別活動(ごみを分類しながら地区の住民同士が話さざるをえない機会を作った)、国への共同陳情機会(国への陳情を患者運動の人もチッソ擁護派の人も一緒に行う中で、敵だった人たちが共に話す場をつくっていった)などです。その中で、水俣病があったからこそその水俣地域のアイデンティティの模索という中で、環境都市につながるコンセプトの定着していきました。繰り返しますが、この背景には、1980年代からの多くの官民レベルでの動きがあってここにつながってきます。

**弓山** 本願の会がエコパークに作った野仏は、お地藏さん以外にもいろいろなものがあります。

**石原** あの石像たちは、患者さんや関係者の方々が自分で彫った様々な石像なんですよ。緒方正人さんが彫られたトトロ、生まれてくることができずに天に行った胎児を象徴する魂石、母子像、四角い石碑に文字が彫ってあるもの、チマチョゴリの石像など、本当に多様で、今も本願の会では石像作りの活動を行っています。エコパークは行政が管理する土地ですから、そこに特定宗教の石像などを建立することは難しいわけで、その意味もあって、それぞれの祈りや思いを込めた多様な形態の野仏にしていったのだらうと思われれます。

## 信仰と研究

**弓山** 石原さんは水俣にお住まいとのことですが、あえて職場から離れ

た、調査対象の地域に住むことには、覚悟やもくろみのようなものがあるのですか。なぜそのような決断をしたのでしょうか。

**石原** 熊本大学に就職したときから、水俣に住所を置きましたが、当初から研究のフィールドとして水俣に住んだわけではありません。大きな天からの導きといえばそれまでですが、理由はいくつかありました。

私は、以前、厚生労働省の研究所で、医療事故の紛争解決トレーニングプログラムをつくっていたことがあり、熊本大学が私を採用した理由はそれだったようなのですが、しかし一方で、私は私自身が医療事故の被害者で、自分自身の問題について深く傷ついたままで、加害者の側すなわち医療者の側を赦すことはできていませんでした。自分にとって最も赦せない加害者に関係する紛争解決を教えることは、トラウマ症状が出るほど苦しいことでした。熊本大学に就職したにもかかわらず、自分が被害にあった医療事故の紛争解決を教えるという仕事が本当に嫌で、向き合うことができず、逃げたいがために移り住んだ先が水俣だった、というような感じです。

海が好きで、海を見ると心が落ち着くということもありました。もう一つは、学生のときに『チツソは私であった』（葦書房、2001年）の著者の緒方正人さんと出会っていたということもありました。私は学生時代に、第一回目の「水俣東京展」の準備委員をしていました。それで、東京展の準備のために、元不知火海総合調査団の方たちなどと一緒に初めて水俣に行きました。私が20歳くらいのときでした。そのときに緒方正人さんの家にも行きましたが、緒方さんは、「緒方家を襲い、父のいのちも奪った水俣病。その理不尽への怒りの思いで患者運動に取り組んだが、運動しても運動しても人間としての回答は帰ってこなかった。その後世界全体がゆれるような“狂いの体験”があり、“私がチツソであった。この世で最も赦されなければならないのはチツソである”と思った」というようなことを話してくださりました。その後、私は医療事故を経験するのですが、自分が自分の傷と向き合えない中で、水俣と緒方正人さんが私の希望の光でした。ですから、研究したいというので

はなく、苦しかった自分が水俣へ行けば息ができる感じがしたという理由で水俣に住み始めました。

研究に関しては、緒方さんとの出会いが強烈過ぎて、水俣病は人生が問われる問題だと感じ、単に研究対象として生半可な気持ちで近づいてはいけないと思っていたため、研究する前にまずは住人になろうと考えました。そのようなわけで水俣に住んでも水俣病関係者の方に特に自分からアクセスすることは最初の頃はなかったのですが、その後、福島原発災害が起きました。私は関東出身ですから、東日本大震災や原発災害を自分ごとに感じました。どうにかしたいと思い関わる中で、水俣と福島をつなげることに導かれました。東日本大震災を経て福島の皆さんをお連れする中で、水俣病問題や、その当事者の方々との距離が一気に縮まりました。さらに今は、遅過ぎるかもしれませんが、紛争解決の原点でもある「もやい直し」をしっかりと研究しようと考えて始めたということです。

**弓山** 先ほど、天からの導きという言葉もありましたが、研究や住まい、スタンスに関して、それが自分の使命、自分に与えられたものとの意識もあるのですか。

**石原** そうです。当初は水俣について研究する研究者になろうとは全く思っておらず、むしろ実存的な自分の被害者としての傷のゆえに、水俣にいれば息ができる感じがして移り住みました。二つ目に、福島との出会いがあって、水俣と関わるようになり、自分の仕事は福島と水俣の関係一色になったこと。そして実はもう1つ、私が生まれた日は水俣病の第一審判決の前日でした。私の父は東京に住んでいましたが、当時は水俣病の裁判支援で熊本地裁にいて、生まれるのが先か、判決が先かというタイミングで私は生まれました。生まれたときから水俣病公害事件に縁があったとはいえません。こういうことが3つもそろっていることを考えると、やはり自分の意志だけではないかもしれません。

信仰者としてという意味で言えば、自分自身が医療事故問題を経験し

たことで、修復的正義、加害者と被害者がどのように正義をもって赦すことができるのかという紛争解決の道に進みました。一般的に、修復的正義はきわめてキリスト教的な考え方だといわれます。私はメノナイトの大学院で学び、多くの人がアフリカなどへ行く中で、私の霊的な師匠であり、学問的な師匠でもある先生から、「あなたのミッションは国内的な紛争解決、平和構築の場にあるのではないか」と言われ、実際私もそのように感じていました。

キリスト教的といわれる修復的正義のエッセンスは、実際はキリスト教だけではなく、いろいろなところにあります。水俣は、患者さんをはじめとする地域の人々の生きる魂の営みの中で、修復的正義の実践のようなものが草の根で生まれて、修復的正義の精神が息づいている場所だと思っています。ですから、自分は修復的正義を研究しているのと同時に、その霊性のようなものを息して体現して生きていくところに自分の使命があると考えています。その中で水俣で生きるこの時間は、とても大切なものです。また現在、水俣の苦難ともやい直しにおいて、既存の宗教がどのような役割を果たしたのかについて研究しており、それと関係して、自分の宗教や信仰とは何かという問いは常に続いています。

## 水俣における宗教団体の活動

**弓山** 水俣における既存の宗教の役割について、私も創価学会や立正佼成会の活動については伺っていますが、石原さんは具体的にはどのように考えていますか。

**石原** 新宗教以前の、明治や昭和初期からある一般のキリスト教会や仏教のお寺の中で、水俣の苦難の際に患者に堂堂と寄り添うことができたところはほとんどなかったようです。人の苦しみや分断がある中で、それをつなぐのが宗教の役割であるにもかかわらず、あのとき、何もしなかったことを水俣の宗教界は反省すべきであるという市民もいます。

水俣には3つのキリスト教会があり、カトリック、ルーテルと福音派

のプロテスタントがそれぞれ1つずつです。正面切って患者に寄り添えなかったという点では、キリスト教会もそうであったようです。私は日本福音ルーテル教会に所属していますが、例えば水俣のルーテル教会は、チッソのエリート社員向けの寮のすぐそばにある幼稚園を持つ教会で、幹部の子どもたちがその幼稚園に通っていましたし、カトリック教会もチッソの会社の目の前にあります。戦前に、チッソが水俣に「豊かな」近代的生活を持ち込んだときに、それと共に「クリスマスを祝う」などのキリスト教徒関連する活動が、西洋化された豊かさの象徴として持ち込まれたと指摘する歴史学者もいます。そういう背景もあったのかもしれない。

それに対して、水俣のとある教会の若いお嬢さんが、杉本肇さんが慰霊式で「母は、チッソも行政も赦す、と行って亡くなっていきました」という祈りの言葉を聞いて、「あそこにイエス・キリストがいる」と思わず言ったと聞いたことがあります。これはイエス・キリストはどこにいるのかという問いにもつながります。最も苦しんだ患者たちに寄り添わなかった当時の教会にイエス・キリストはいたのかいなかったのか。



左上：弓山達也（ゆみやま・たつや）

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授、(公財)国際宗教研究所常務理事。

はてまた、イエスは、患者の中にいたのか、という問いになり、その意味でも面白い場だと思いつつながら、水俣を見て暮らしています。

結論からいえば、加害者も苦しんだ、この水俣においては、やはりそこにキリストがおり、患者の中にもキリストがいたはずです。それは仏教の視点から見たら、仏性という言葉で語れる部分もあるのかもしれませんが。他にも、水俣の場合には新宗教の役割もあります。

**弓山** ありがとうございます。教会や寺院、神社そのものではなく、多くの宗教家もさまざまな支援に関わっていたので、宗教家個人としての関わりもあるかもしれないと思いました。

## いわきの弔いの儀礼「じゃんがら念仏踊り」の宗教性

**弓山** 霜村さんは、僧侶のお立場として、浜通りの民俗芸能・盆の宗教行事の「じゃんがら念仏踊り」の活動をどのように捉えていますか。じゃんがらは、一宗派を超えた、地域ごとの青年会や保存会によって担われていて非常に魅力的です。

**霜村** いわきの弔いの儀礼といえば「じゃんがら」で、引越して来たときは、何という地域だろうと思いました。実際に行っている青年会員からすれば、じゃんがらは青年会として数年間は入らなければならない消防団や村祭り、草刈りなどと同じような、いわば負担の一つです。しかし、じゃんがらの場合は、巡っていると、それぞれ行った先からの実入りがあり、それを積み立てれば年に1度の慰安旅行程度はできるという側面もあるものでもありました。

ところが、震災で多くの方が亡くなり、「じゃんがらの音を聞いて励まされた、うちの仏様のためにありがとう」と言われることを通じて、じゃんがらをしている本人たちが、改めてその宗教性に気づいたというのはよく聞く話です。

私はじゃんがらの中の人ではなく、イベント要員で、お坊さんはじゃ

んがらのシーズンに盆巡りすることはできません。私は地元出身でもありません。本来はじゃんがらも地元の地縁の中にいなければ入れないものでしたが、後継者不足もあり、最近では緩和されました。また、小学校や中学校でクラブ活動として体験した子どもたちが、卒業後もそれを継続したいとの声がありました。また、以前はじゃんがらがなかった地域で、じゃんがらを行いたいという有志が団体をつくり、在来の滅亡寸前の青年会から踊りを教わって、同じ型で踊るようになりました。するとお互い踊りを手伝うことができるようになりました。このように震災後のじゃんがらの動きは非常に興味深く、これだけでも研究価値があるテーマです。

私も偶然、念仏の宗派に属していますが、いわきには念仏信仰のベースがあり、江戸時代の初め頃にじゃんがらが爆発的に流行して定着し、以後、300年続いています。ですから、この地域には理屈抜きに、じゃんがらがあることで癒やされる人たちが間違いなくいます。行事に招待を受け東京の増上寺で叩いたこともあります。そのときには、団体参拝に来ていた東京のお檀家さんたちが「念仏を唱えて拍手をしたのは初めてだ」と言っていました。そのときに、そう言われればそうだけど、いわきでは弔いの場で間違いなく拍手をしています。非常に面白いと思います。

(未来会議内でも始まった)よさこいにもつながっているのかもしれませんが、いわきの人たちはおそらく踊ることが好きなのでしょう。

「いわきおどり」という夏のお祭りがあります。もともとは、本来の盆踊りである「平小唄」や「四倉音頭」のように地域ごとにいろいろな曲があり、それが踊り継がれていました。炭鉱地域では「常磐炭坑節」もあり、さらに猥雑なものとして「やっちきおどり」が出てくるなどしています。これらは、アート仲間のリサーチから私が聞いた情報です。アート活動がそのような歴史を掘り起こしてくるという現象も度々目の当たりにしています。そのような古くから踊り継がれているものがあるにもかかわらず、いわき市が約50年前に大合併した後に、統一した踊りとして新しく開発したのが「いわきおどり」です。ゼロから作曲して

各小学校や中学校で踊らせ、子ども全員が踊れるようにしたうえで、中央での祭りをを行うという流れがありました。それでも、それを何となく踊り継いでいます。いわきの人はいわきおどりの「どんわっせ」を聞くと血が騒ぐようです。

いわきは踊りの宗教性に親和性のある地域だと思っています。いわき出身で菩提院開山の浄土宗僧侶「袋中上人」は念仏を初めて沖縄に伝えられて、この念仏がエイサーの原型となったと言われていました。じゃんがらは袋中上人が旅立った後にいわきで大流行した念仏踊り。つまりエイサーとじゃんがらとはきょうだい関係なので、沖縄の人たちが自らの米軍基地の問題と原発の問題を重ね合わせながら、祈りを届けてくれます。いわきの人に、3月11日の大事な日にエイサー隊が太鼓を叩いて踊っている理由を、「これは沖縄のじゃんがらだから」と説明すれば、「そうかい、ありがとう、よく来てくれたね」とすぐわかってくれます。

双葉郡富岡町の夜の森で震災前に開かれていたよさこい祭りが復活しました。2017年に未来会議の「浜通り合衆国」がきっかけとなって、よさこいの新たなチーム「よさこい浜さ Koi」が結成されました。元々の住民だけでなく、他所から来て関わってくれる人や移住してきた人たちも踊りに加わることができます。そして震災前にここで踊っていた人と同じ景色を見るという追体験ができることで、浜通り・双葉郡の一員としての自覚を持てるようになったのではないかと。というのが、私のこのチームに対するイメージです。また、踊って祈ることに対する抵抗感がない地域ですので、よさこいの復活にもつながったのだらうと思います。

**弓山** 未来会議は、踊って、歌って、アートができる人材が豊富でうらやましく思っています。

**石原** 熊本地震のときにも、霜村さんたちがじゃんがらで祈りを届けてくれました。臨床宗教師の人たちと一緒に。ですから、霜村さんと私は、普段はお互いが宗教者であることをそれほど意識していませんが、

それでもそのような縁もたくさんあると思いました。

臨床宗教師は東日本大震災の後に始まったものですが、熊本は東北に次いで臨床宗教師数の多い県です。私たちだけでなく、臨床宗教師の人たちも原発災害や東日本大震災の、熊本への避難者のためのカフェや支援活動を熱心に行っていました。それで縁がつながることもあります。

## 宗教者として生きる

**弓山** 長丁場の対談になってしまいましたが、お二人から何かご質問などはありますか。

**石原** 霜村さんには、仏教者としてじゃんがらや未来会議をどのように思っているかや、震災後の普段の活動と仏教者であることの関係の聞いてみたかったのですが、もうお話しいただいてしまいました。

というのも、霜村さんを見ていて、家庭がお寺で、仏性のようなものが体に息づいているおられることが、素晴らしさだといつも感じます。未来会議の在り方、じゃんがらについてなど、あえて「仏教者として」と言わなくても、その息の中に仏がいるというのが霜村さんだ感じます。すてきなことです。私は親からではなく私の世代でクリスチャンになったので、キリスト教でも仏教でも、代々続く家の良さがあると思っています。

**霜村** 実は自分としても、それは主張したいことでもあります。自坊は檀家寺で、ある程度の数の檀家もいるので、朝のお勤めをして、頼まれた法事とお葬式をしていれば生活できます。それ以上のことをしなくても、一人前のお坊さんとして過ごすことのできる環境があります。しかし、アート活動やお寺の場のコモンズとしてのありようなども教えてもらっていたり、震災というきっかけもあったりして、お寺の使命の一つがこういうことだと主張したいと、普段から思っています。場づくりも、人の話を聞くのも当然のことです。その上で、何か役に立つ言葉を

掛けることができれば、なおよいということです。

未来会議を通じて、人々が集う場所で全てのお坊さんがファシリテーターになれば、世の中がもっと良くなると思いました。お坊さんたちは昔からファシリテーターであり、調停者として和解を促し、紛争を解決してきたと思います。寄り添う立場であること、この非生産的な職業がこの国で1000年以上続いてきたことの価値はそこにあるでしょう。お坊さんたちにも、お坊さん以外の人ともたくさん話してほしいと切に願います。

**石原** 自分の中で、紛争解決、平和構築、修復的正義を生きることは、先ほど、その実践はときに集団お葬式のようなものであると申しましたように、信仰者として生きる、宗教を生きる、霊性を生きることと切り離すことができません。また、生きることと、霊性を生きるとは切り離しがたい。

たとえば、紛争解決の大学院で社会人の大学院生の指導をするときも、もちろん国立大学なので特定宗教の話はできませんが、宗教の話に触れます。キリスト教だけでなく仏教などさまざまな宗教のことを組み込んでいます。

大学院で目指すのは、紛争解決実践者・研究者としての成長ですが、それは、知的な成長だけではなく、霊的な成長もセットでなければなりません。成長であり、霊的な癒やしです。これは、自分が学んだ米国のメノナイト大学の影響が強いと思います。メノナイトの大学では、世界各地の内戦地等からの多様な宗教的バックグラウンドをもつ院生たちが、祈り倒されながら、育てられていました。霜村さんの話を伺って、Spirituality in daily lifeではありませんが、大切だと感じました。

## 仏教の「手放し」の解釈をめぐって

**石原** 最後にもう一つだけ聞いてもよろしいですか。修復的正義や和解においては、加害者と被害者が向き合い、被害者に起こったつらいこと

に加害者が耳を傾けて、痛みを共に感じ、責任に目覚めていくところから和解が始まります。修復的正義はそのような対話を基礎にしています。しかし大学院の授業などで修復的正義を扱うと、社会人の院生などから「罪と向き合うことができるなら美しいが、日本人には合わない、やはり日本人は仏教で武士道だ」とよく言われてしまいます。武士は食わねど高楊枝で、ごちゃごちゃ文句を言わないものだと。仏教的にも「手放す」ことが重要だと。そして、被害者が自分の苦難や痛みを話すことは、文句を言っているようで美しくないとよく言われるんです。

水俣でもそういう話を聞きます。被害者が声を上げると、「あの人たちはぐちぐち文句を言っていて、潔くない、手放しが足りない」などと言われてしまいます。仏教でも「手放す」という言葉があります。正義、赦し、関係性を再構築するときに、水に流せという話と、きちんと痛みや罪と向き合うという話は、仏教からはどのように見えるのでしょうか。多くの宗派があるので一言ではいえないかもしれませんが。

**霜村** 難しいですね。

**石原** もう一つ加えると、たとえば浄土真宗の若い人たちの中には、憲法9条や原発事故の問題で頑張っている人たちがいます。しかし浄土真宗の中にも一部、その人たちに対して、「そのような社会問題に関わるのは手放しが足りないからだ、修行が足りない」と言う人たちがいます。このように浄土真宗の中には、社会問題に関わる派と、関わるのは修行が足りないからだという派があると聞くのです。社会問題にかかわるのは、怒りを手放せていないからだ。実は、それはルーテル教会の中にもあって、署名活動などをしている牧師が、「赦しが足りない」というニュアンスで指摘されたこともあります。そのようなことが気になっていました。

**霜村** 「自行」の部分と「化他」の部分で差があるということかもしれません。自己の修養、修行として、手放しは非常に重要でしょうし、一度

手放してみるからこそ、痛みをもう一度客観視できる。しかし、目の前で苦しむ他者を救うためにそれを説いたとしても、恐らく救うことはできません。必ず、相手のことを受け止める段階が必要です。「そうですね、苦しいですね」と言わなければ始まりません。「あいつらは悪くて、俺たちは苦しい」と言える環境をまずは作ってあげることが、他者の救済になるのです。

もちろんお坊さんの場合は「俺が苦しい」ばかり言っていると、「あなたは修行が足りない」と言われてしまいます。ですから、自分の修養の部分と他者を救う部分では、手順が少し違うと思います。自分の主張をするという段階は必要です。その上で、その手法が本当に効果的なのかどうかについては、活動の内容によるのかもしれませんが、仏教的、お坊さんのような答えかどうかはわかりませんが、今、思い付いたのはこのようなことでした。

弓山先生ならどうお答えになりますか。

**弓山** 仏教に結びつけて話すとするれば、「手放し」は「あきらめ」と言い換えることができるでしょう。あきらめは敗北ではなく、現象と苦しみを分けて考えるということです。つまり、「差別や攻撃を受けた」という現象と、「苦しい」ということを、分けて考えることが、あきらめる秘訣かもしれません。

**石原** ありがとうございます。今日は多様な方向の話をしていただきましたが、水俣を生きる宗教性については、緒方正人さん、石牟礼道子さん、杉本栄子さんらなどのその思想と霊性などに関する深い議論が可能だろうと思います。ぜひ弓山先生と、またご一緒に深める機会があればと願っています。

**弓山** 石原さんのお話を聞かせていただいて、後についていきたいと思えます。よろしく願います。

## 注

---

- 1) 16世紀頃に成立したキリスト教の一派で、非暴力と平和主義を掲げる。17世紀にはアーミッシュと分派した。メノナイトの一部にも、現在も当時の生活様式を保持し電気や車を使わない生活様式を続けている人々がいる。
- 2) 一般財団法人水俣病センター相思社理事。著書に『みな、やっとの思いで坂をのぼる―水俣病患者相談のいま―』（ころから、2018年）がある。
- 3) 水俣病の語り部として、自らの体験を語り継いできた杉本栄子さんの長男。
- 4) 弓山達也ほか「ボランティアは躓きながら現地をめざす」『宗教と社会貢献』10（2）、2020年。
- 5) インターネット配信「いわき経済新聞」編集長。2014年、横浜市から福島県いわき市に移住、2019年から双葉郡に暮らす。
- 6) 作家の石牟礼道子、『チッソは私であった』で知られる患者の緒方正人、先の杉本栄子らによって1995年に設立された。